

## 「感動体験を目指す教育の展開」より抜粋（感動体験プログラム構想委員会（H9））

### I 今なぜ感動体験か

#### 1 生きることと一体化した体験

「生きる力」を育む教育においては、知的な学習のための体験とは区別された、体験そのものから直接学ぶ、あるいは生きることと一体化した体験が重視されなければならない。感動体験はこのような体験として理解され、それは人の心に深く刻まれ、人間形成に大きな影響を与える。

#### 2 感動は「生きる力」の源

「生きる力」における能力は、今まで経験したことのない課題に出会った時に、自ら問題解決を図る能力が重要な位置を占めている。体験活動で得た感動は、問題解決のきっかけになることもあり、また感動そのものが直接的に生きていく自信につながる場合もある。感動は、正に「生きる力」の源であると言える。

#### 3 あふれる疑似体験

かつて子どもたちは、屋外での遊びを通して自然体験や社会体験をしていた。また家庭においては、それぞれの子どもが役割を与えられ、生活体験を積んでいた。子どもたちは自ずと本物の体験をしていたのである。

しかし現在は物質的に豊かな世の中になり、生活が便利になる一方で、直接的な体験の機会が身の回りから失われてきた。コンピューターや情報通信手段等の飛躍的な発達により、子どもたちは野外で、かつ集団で遊ぶことも少なくなり、自然と触れ合う機会も減り、もっぱら室内でテレビやビデオを見たり、テレビゲームに熱中したり、ポケベルや携帯電話を使ったやりとりなどが盛んとなり、コンピューター等の電子機器を使った画像などによる疑似体験や間接体験の機会があふれている。

そのため、子どもたちはますます孤立した自分だけの世界に入り込み、自然への畏敬の念が薄れるとともに、人間関係も希薄になってきていると思われる。

#### 4 今こそ感動体験を

子どもたちが、やさしく、たくましく、豊かな人間関係を築きながら、生きる目標を持って、生き続けることができるよう生きる力をはぐくむためには、今こそ自然や社会に直接触れることによって、生きることと一体化した体験となりうるような感動的な体験の機会と場を、大人たちが作り、守っていくことが必要である。

## II 感動はどこから生まれるか

- 1 行動する
- 2 人生を探索する

今日の社会においては、教育体制等が整備されすぎていて、子どもたちの自力で人生を探索する能力が鈍ってきている。

釣った魚を与えるのではなく、魚の釣り方を学んだり、魚の釣り方を工夫するような教育、結果を教えるのではなく、かかわり方を学ぶとか、学び方を学ぶ教育が今必要となっている。

- 3 本物と出会う
- 4 異質なものと出会う

人は、異質なものや意外なものとの出会いによって、驚き、感動を覚え、探求へと導かれていく。

- 5 辛さを乗り越える

## III 感動する心をどう育てるか

- 1 感動する心は促成栽培できない

物事に対して深く感動するためには、やわらかな心が子どもたちに育っているか否かにかかっている。やわらかく、しなやかな心の育成は幼児期から始まっている。アメリカの海洋生物学者のレイチェル・カーソンは、「生まれつき備わっている子どもの『センス・オブ・ワンダー』をいつも新鮮に保ち続けるためには、わたしたちが住んでいる世界の喜び、感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、少なくとも一人そばにいる必要があります。」

- 2 子どもたちの内面を育てる

体験活動を通して得られる自然に対する驚きや畏敬の念は子どもたちの情操を育て、思いやりの心ややさしさを育てる。

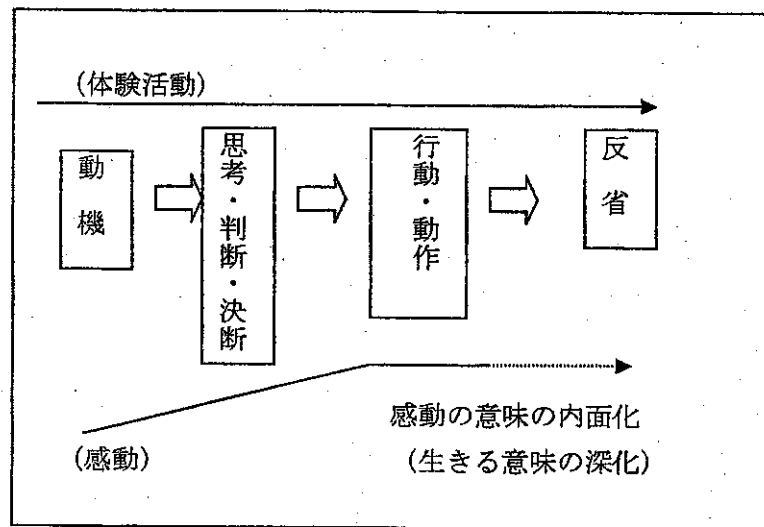
体験活動は出会いであるが、とりわけ人との出会いが重要である。他者とつながること、他者に働きかけること、他者から影響を受けることの中で、お互いに助け合い、やさしさや思いやりの心が育っていくのである。

- 3 生と死を考えさせる

子どもたちの発達段階に即して、生と死について自ら考えさせ、生命の有限性や今ここに生きていることの素晴らしさや自他の命を尊重することの大切さを教える必要がある。生命の尊さを知り、自然への畏敬の念を抱き、生かされてあることのありがたさに気づくことは、やさしさや思いやりの心を育て、感動するやわらかく、しなやかな心を育てることになるのである。

#### IV 体験活動をどのように進めるか

- 1 行動する機会や場をつくり、守る
- 2 発達段階に応じた対応を考える
- 3 表現する機会と場を設ける
- 4 継続的な体験活動を目指す
- 5 体験活動の記録をさせる



体験活動の全体像と感動との関係

#### V 体験活動を学校教育の中にどのように位置づけるか

- 1 人は人でしか磨けない
- 2 教科の枠を越えた学習の中に体験学習を取り入れる
- 3 特別活動の充実を図る
- 4 学校外の活動を単位認定する

#### VI 体験活動を支える教師をどう育てるか

- 1 教師自身の体験活動の必要性
- 2 教師のための感動体験プログラムの必要性